

派遣先所属 福島県農林水産部相双農林事務所 農村整備部
氏 名 君嶋 克一 (きみしま かついち)
派遣期間 平成28年4月1日～平成30年3月31日

1 派遣業務の内容、現況

派遣先の相双農林事務所農村整備部では、主に災害復旧を併せて行うほ場整備事業や農地防災海岸堤防の復旧、農地防災林の新設、土地改良施設（ダム・機場）の復旧に関する業務を行っています。

これは地盤沈下した農地の盤上げや津波で破壊された海岸堤防の復旧及び嵩上げ、流失した防風林を防災林として再整備するなど復旧と将来の防災を意識した追加整備を行うものです。

現在、私が派遣されている相双農林事務所農村整備部では、正職員53名、再任用及び臨時職員17名、県外応援職員17名の計87名で日々の仕事に従事しています。

福島県では膨大な工事量に対し、工事監督ができる技術職の職員が少ない状況にあり、これに応急的に対応するため、退職者の再任用や民間経験者の採用を積極的に行いつつ、新規採用職員の採用を増やしていますが、それでも人手が足りずに他県の応援職員を必要としています。

震災から6年以上経過していますが、津波被害が甚大だった海岸側はまだ手つかずの部分があり、比較的被害が少ない場所から順次復旧しているものの、施工業者の確保が厳しく、進捗が遅れている状況です。

また、沿岸部の大部分の農家の方々はまだ農業を再開出来ていない状況にあり、時間の経過とともに営農意欲も下がっていることに加えて、福島第一原発が比較的近いため、風評被害も営農再開に踏み切れない大きな要因となっています。

このことより、農家の営農意欲を維持しつつ、元の生活に戻るよう農地の復旧・再整備が急がれています。

担当業務は災害復旧とほ場の再整備を併せ行うほ場整備事業「八沢地区」の工事監督業務です。「八沢地区」は相馬市と南相馬市にまたがる地区であり、主に南相馬市側のほ場整備の工事監督及び設計積算を正職員の若手と分担しています。

具体的な工事内容は農地の盤上げ、農道の新設、破損している旧水路の撤去及び再設置を行うのですが、これら復旧整備にプラスして、営農が省力化できる様に開水路の用水路を管水路とし、自動で水田に水を掛けられるシステムを導入します。

これは、従前では農業用水がため池や井戸等で賄われており、地区の用水事情が厳しかったことから、今回、ほ場整備で管水路に変更することに伴い地区を縦断する幹線排水路から再びため池に用水を圧送する仕組みと水田の維持水位を自動で一定に保つ方式を用いて節水を実施し、用水事情を改善するものです。

工事については、毎月1回の地元農家と施工業者を交えた工程会議を行い、進捗度合いの確認や作業の支障など洗い出し、工程に遅れが出ないように対策を練りながら行っています。

この会議は普段なかなか聞こえてこない地元農家からの意見が分かる重要な会議であり、この会議を始めて以降は工事の手戻りも少なくなりました。

この業務に従事して2年目となり、だんだんと地元農家さんの信頼も得られるようになりまし

た。

地元農家さんと話す機会も増えたことにより、なかなか気付けない問題に直面する前に対応できるようになってきたと感じています。

今後は、もっと地元の農家さんと話し合いながら整備を進め営農意欲が湧くほ場整備を目指したいと思っています。

他の都道府県からの応援職員は、知識・経験ともに豊富で難題を前にすると応援者同士で集まって、自県ではどう対応していたのか話し合い、問題解決の糸口を掴んでいます。

また、今回の派遣職員は若手が多いですが、派遣元の県を代表してくるだけあって頼もしく、私も負けていられないと日々切磋琢磨しています。

応援職員のほとんどは同じ寮に住んでいるため、プライベートで出かけることも多く、週末は東北の山々を登り、その帰りには温泉に入ってくる小旅行を楽しみながら、お互いのコミュニケーションを図っています。



工事の監督の様子



地元農家さんたちと現地で打合せ

2 被災地の復旧・復興の状況

私が派遣されている相双農林事務所の管内では帰還困難地域を除き、インフラ復旧はほぼ完了していますが、いまだ仮設住宅に住まわれている方も多く、住宅の再建などが急務になっていると感じています。

また、復興事業のため全国各地から作業員の方が被災地に仕事に来ていますが、住宅事情が厳しいためアパート等に入居できず、ホテル住まいの作業員の方も大勢いるような状況です。

下記の画像は南相馬市の最大級の仮設ホテルの様子ですが、一部で民間の宿泊施設が需要に追いつくように仮設の部屋を増設するような動きがあります。

今後は、宿泊施設の建設ラッシュで住宅事情が多少解消されると思われますが、帰宅困難区域の緩和・縮小が進むにつれて、これまで入れなかった地域の復旧工事が増えてくるため、今後も住宅事情の厳しさは続くと思われます。



福島県南相馬市最大の仮設ホテルの様子

3 被災地へ派遣となって感じたこと

福島県に派遣となって感じたことは、被災県以外のところで、震災から6年以上経過し、復旧・復興もほぼ完了しつつあるという風潮があるということです。

確かに復旧・復興は目を見張るほど進んでいます、福島県は他の被災県と違い原発の影響でいまだに整備に入れないという問題があり、他の被災県より復旧・復興が遅れています。

福島県はこれからが真の意味での復旧・復興に遷移していきますが、世間では復旧は終わりつつあるという風潮のためか、官民間問わず技術者の数が徐々に減少してきています。福島県ではまだまだ人員不足が続き、引き続き県外応援者の力を必要としています。

一方で、被災地の復興は一步一步着実に進み、震災当初にあった悲壮感はなくなり、そこに暮らす人々が前へ向いて歩き出し、復興に積極的に活動しています。

私が担当する「八沢地区」でも、この秋に作付けできる範囲が大幅に増え、地元農家の方はやっと農業ができると顔がほころんでいました。

この嬉しそうな顔を見ることができ、派遣職員として福島県に派遣され、この復旧・復興を手助けする仕事ができ良かったと感じました。



各県からの応援者



営農を再開した八沢地区